

国勢調査を終えて

国勢調査の有効利用を願う



下館市国勢調査員
渡辺 作右衛門

全国で78万人、市では329人の国勢調査員の一人として揺れ動く外憂内患の政情のこんにち、国際貿易経済摩擦と民活拡大の梃入れとあるいは議員定数は正問題等、誠に重要な意味をもつ世界に冠たる第14回国勢調査に参加でき、光栄の極みです。私は数えて6回目の国勢調査員であるが、かねてよりこの1枚の調査票のもつ機能の偉大さと、これが行使され、現実を的確に診断し、限りなき未来を創造して、政治に行政に活かされる資料作りの任に重い使命を感じると共に、数字の提供者であり使用者であることに、大いなる誇りを感じます。

下館市も例外ではなく、昭和29年早春、市制施行成って以来神武景気を契に人口の著しい増加を見、開発につぐ開発で生活環境の変貌は正に目を見はるばかり。今や県西の雄として、6万4千の人口を数え都市化の中で新住民地域が、混住地域が次々誕生する構造的変革に、統計業務も大変苦勞を強いられている現在です。市長以下市民総ぐるみの「対話と協調」の中で、香り高い文化と福祉の街、心豊かな人間づくり運動を展開中です。

次に、国調余聞を一言。およそ統計は国の政治と行政、自治体の行政に不可欠最高至宝的な基礎作りなるにもかかわらず、友達の話によると、最近転入してきたと思われる1人世帯の調査対象者に苦勞してやっと面会したところ「国調とはなん

のことだ。僕はこんなに調べられるのは生まれて初めてだ」と言われたとのことである。その対象者の年齢からすれば、これまでに国勢調査を4、5回は受けているはずなのに、と憤りを感じた。昨年2月、雪の降る日、涸沼湖畔で開催された県統計事務改善研究会での熱のこもれる県下の統計マンの集いに参加している自分は、この有り得べからざることに強い衝動にかられた。

こいねがわくは、現在総中流という風潮の社会で、多くの人が家を留守にし、仕事に励んでいる実態を知り、多大な費用とこのような労力をもって実施された調査結果が、真に我々国民の暮らしに活用されますよう念じ「支持するが信頼せず」とならぬよう願ってやみません。

最後になりましたが、関係機関の方々のご指導ご鞭撻に対し深甚に感謝申し上げ、限りある日まで、誓って誇れる統計マンになるよう努力したいと考えている。

国勢調査を終えて



勝田市国勢調査員
廣田 順子

私なりにこの仕事をさせていただいて、国勢調査というものを色々な面から見ることができました。

関係者のだいぶ前からの下準備、勝田市だけでも500人以上もの調査員が動員されること、そして調査員の層も前回までは年輩の男の人が多かったのに、今回は主婦がずっと増えたことなどは、主婦の社会参加意識の一端をみたように思いました。

調査内容については、主婦の一人として気にな

る点もありました。就業欄の所で報酬を受けている人だけが仕事をもってしているとして扱われており、ボランティアや地域活動をしている人、寝たきり老人を抱えている人などは、収入がなければそこで記入終了とされているのです。近年、主婦の社会参加への意識が増加している折から、調査内容をさらに進め、広範囲にわたる活動内容を調査したなら興味あるデータが出たのではないかと、ちょっと残念な気がしたのです。

また、実際に調査区を歩いてみて、想像以上に留守宅の多いのには驚きました。昼間はもちろんのこと、夜もなかなかお会いできず、これでは回収は思いやられると覚悟したのですが、やっと相手に会えた機会をとらえ、書き方の説明に加え、調査票の回収の日時を相談して決めた方も多く、その約束をほとんどの方がきちんと守られたのには感心させられました。勤めに出ている方は、玄関脇の箱に入れておいて下さったり、隣の方に忘れずに預けておいて下さったり、ある方は約束の日に留守にしたからと、道を尋ね我が家まで届けて下さったりしたこともありました。それには私も子供たちも大感激。しみじみと「相手の身になってみる」という当たり前の教訓に触れた思いでした。

気軽に始めた調査員という仕事も、終わってみると私にとって内容的に大変重みのある経験となり、5年後にはまたやってみようという気持ちさえ生まれました。

今日もニュースで「年末に国勢調査の結果を待って……」ということを言っていました。さて、どんな結果が出るのか、行政にどのように役立つのか、とても身近に感じられます。

国勢調査の結果のニュース 気にかかる

私もひとりの調査員なれば 順子

初めて調査員を体験して



守谷町国勢調査員

高井 洋子

調査票を無事役場に提出し、ホッと肩の荷をおろしてから、早いもので1ヵ月が過ぎました。国勢調査の思い出を書くように言われ当惑しましたが、感じたことを率直に書いてみたいと思います。

守谷町の住民となって4年がたち、下の子供も小学生となりました。このごろは自分自身のことや、地域のことに少しずつ気をくばれるようになり、主人や成長著しい子供たちに差をつけられないように、何かやらなければと思ってたちょうどそんな時でした。役場からの回覧で、国勢調査員の募集を知り、不安がありましたが「何事も経験」とばかりに応募しました。しかし、採用されることになり日が迫ってくるにしたがって不安ばかりで、昔の自分を思うと不思議なくらい臆病になっていたのです。12年間も家庭の中だけを見つめてきたので無理もないな、と自分で慰めたり大変でした。説明会も終わり「今日から出発」とはりきっていた日に子供が熱を出し、まず初日は駄目。次の日が大雨で、大事な書類を濡らしてはと思いつつ、空を見上げながら終日、自分で作った予定表通りにはなかなか進めませんでした。

また、私の調査区は団地だったため、日中は半分以上のご家庭が留守で、全戸配布するのに大変な日数を要してしまいました。身仕度にも注意した

り、もちろん言葉使いにも気をくばって歩いたつもりでしたが、ある日ご年輩のご婦人に「あいさつが遅い」としかられたこともありました。とてもショックでした。泣きたいぐらい淋しい気持ちになって帰宅してしまいました。そんな晩でした。役場の係から「何か問題がありませんか」との電話があり、いろいろな話をしているうちに、100人以上の調査員が私と同じような苦労をしていることを知りました。その電話の応援と、友人の調査員の励まして、次の日から新たな気持ちで、元気よく、誰にも聞こえるような大きな声であいさつをしながら回りました。10回以上も訪問したご家庭もありました。お陰で家庭の中で孤独だった生活と異なっていて、誰とでもあいさつできるようになりました。

今になってみれば、あの時しかられたことが、本当に良かったと感謝しております。そして「5年後も応募しようかな」などと思っている今日のご様子です。

情報化時代のなかで



牛堀町企画振興課長

萩原正吉

昭和60年国勢調査の業務に携わった町職員の一員として所感を述べさせていただきます。本調査は各種統計調査の中でも膨大な規模で行われる重要な調査であり、円滑な調査の遂行のため、実施体制、指導員・調査員の選考、事務打合せ会、調査、審査の方法等について細心の注意と配慮をいたしました。

調査を終え特に感じましたことは、近年は社会状況の変化により情報化の時代と言われておりますとおり、広報及び情報の普及は極めて顕著であり、このような中で今回国や県において行った国勢調査に関する新聞広告、テレビスポット、テレビ番組、雑誌掲載等マスコミを媒体とした広報については特に効果があり、調査対象世帯員の国勢調査に対する理解と認識が十分浸透したと考えられます。

町としてもこれらにあわせて、「広報うしほり」に1回、毎週発行の「週報うしほり」に9回、「調査に対しての協力、調査員・調査区等の紹介」を掲載し、新聞折込み、郵送等により各世帯配布を行い、国勢調査の周知、啓発に努めました。この結果、調査に際しては相談、苦情、非協力等特になく、スムーズに調査ができた大きな要因と考えており、今後におきましても時代に即応した広報、情報による周知は特に大事であると感じました。

次に調査の結果ですが、国勢調査の速報値が12月中には公表される予定であり、前回55年の全国速報値の誤差は、2,911人(対確定値比、0.002%)と驚くほどの微差であり、県、市町村ごとの速報、公表とあわせて大きな関心をもっております。

現在のような複雑な社会においては行政施策の一つ講ずるにしても、また特に大規模な施策に取り組む場合は、現状の把握と将来の予測をきちんとしたうえでしなければなりませんし、新しいデータという要素から調査の結果に大きな期待を抱いております。

今後は逐次公表される集計結果、性格を十分分析し、新しい行政施策の指針として活用してまいりますとともに、更に統計業務にもなお一層の研鑽を重ねていきたいと思っております。